

12 回復期病棟から訓練目的で当院に入院した頸髄損傷患者の特徴

病院リハビリテーション部 井上美紀

飛松好子

2000年回復期リハビリテーション病棟が新設され、脊髄損傷患者も早期社会復帰を目指して、充実したリハビリテーションが提供されている。当院では、回復期病棟での訓練期間終了後、更なる訓練継続を目的に入院する頸髄損傷患者が増える傾向が見られる。回復期病棟での訓練終了後、訓練継続目的で当院に入院した頸髄損傷患者について調べたので報告する。

【対象】

2010年4月～2016年5月、回復期病棟から訓練目的で入院し作業療法を実施した外傷性頸髄損傷者18名。

【方法】

作業療法実施記録から、以下の項目について調べた。

入院時年齢、入院期間、合併症

ASIA機能分類、機能レベル 可動域制限・痛み・痙性の有無

入院時及び退院時のADL、(FIM motor)

【結果】

対象者は男性17名、女性1名。入院時平均年齢は49.1(26～75)歳。

入院期間は平均144.1(98～248)日。

合併症は、両肩腱板損傷、上肢骨折、下肢多発骨折、股関節異所性骨化が各1名いた。

ASIA機能分類では、A:6名、B:3名、C:6名、D:3名。

機能レベルは、C4:3名、C5:4名、C6:4名、C7:4名、C8:3名。

入院時、上下肢に関節可動域制限があった者16名、頸部や肩、下肢に痛みのあった者5名、上下肢の痙性は6名が問題と記録されていた。

FIM運動項目平均得点は入院時28.4(13～66)、退院時は39.8(13～83)。

FIMの下位項目ごとにみると、C4・C5の者は、1名のみ入院時一部介助で食事が可能であったが、他は入院時座位耐久性が低く全ての項目で全介助と評価されていた。退院時、食事動作と歩行・車いすの項目は7名が準備介助や一部介助で可能になっていた。彼らの半数以上はポータブルスプリングバランス（PSB）や電動車いすを使用していた。C6以下の者の入院時FIMでは、更衣、排泄、入浴関連動作で介助量が多く、これらの動作訓練の経験がない者もいた。

当院入院前のADL訓練について、「経験が少ない」、「未経験」と記録された者が7名いた。

【まとめ】

今回の対象者は、比較的年齢は若く、不全麻痺の者が多かったが、歩行が自立した者はわずか1名のみであった。入院時、座位耐久性が低い者や、関節可動域制限などある者は多かった。しかし、ADL訓練の経験が少ないため介助を要していた者も多かったと思われる。